

平安和文会話文における準体句 — 助詞「は」後接の場合 —

土岐 留美江

日本語教育講座

Quasi-nominal Phrases in Heian Japanese Conversational Texts — Cases with Postpositional Particle “wa” —

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Abstract

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending) which are accompanied by postpositional particle “wa,” in comparison with those without postpositional particle, those with postpositional particle “ga” and other attributive constructions such as adnominal clauses or final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese.

The specific findings are as follows:

- (a) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “wa”, verbs of motion/change, verbs of emotion/thought/perception, verbs of existence are most frequent, in descending order.
- (b) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “wa”, all adjectives types (emotional, attributive and intermediate) appear.
- (c) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “wa”, past and perfect auxiliaries are frequently used, but some conjecture auxiliaries are also frequent.

It is revealed that there are some usage differences between quasi-nominal phrases with postpositional particle “ga” and those with postpositional particle “wa.” In order to clarify the relationship between quasi-nominal phrases and final-attributives in the syntax of adnominal-ending forms, it is necessary to examine their uses more extensively, including those accompanied by other postpositional particles.

1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する連体用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止との表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて、山内（2003）を代表とする多くの先行研究

がある。

また、③の準体用法については、断定の助動詞の活用語承接の衰退について連体形準体法の消滅と関連づけて論じた信太（1970）や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した同（1987）、準体助詞「の」の成立との関連を論じた同（2006）、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤（2001）などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広がり、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②文終止、③名詞句形成、という相互にまったく異なると思われる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存

在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出（山内（2003）p. 141）」と見る解釈がなされており、尾上（1982）などでも同様の立場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究においては、連体形による各用法がしばしば相互に関連づけられて論じられており、特に信太（1996）では、推量辞の出現に着目しつつ、連体句、準体句、接続句、終止形上接句、連体形終止文、係り結び文の六類の句について、連体形による句としての総括的な比較対照が試みられている。

しかし、連体形の各用法の特徴を、データに基づき数量的に比較分析した研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。

土岐（2005）では、連体形終止法を終止形終止法やゾ、ナム共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合と比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度に特徴があることを明らかにした。また、土岐（2008）では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは、各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについては土岐（2009）、助詞「が」が後接するケースについては土岐（2010）、助詞「を」が後接するケースについては土岐（2011）、助詞「に」が後接するケースについては土岐（2012）で考察を行った。本稿では、助詞「は」が後接する準体句について分析を行う。

2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。本稿で引用した土岐（2007）の連体法のデータも同様の資料に拠っている。

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

一方、土岐（2005）で連体形終止法および終止形終止法の分析対象とした資料および使用テキストは以下のものであり、源氏のみを使用した準体法および連体法の場合とは調査範囲が異なっている。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。¹

3. 分析対象形式

土岐（2005）で考察した連体形終止については、地

の文と会話文とで大きく用法が異なることが先行研究により指摘されているため、会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較上、連体法を分析した土岐（2008）や、助詞無し準体法および「が」「を」「に」後接の準体法を分析した土岐（2009）、土岐（2010）、土岐（2011）、土岐（2012）でも、同様に会話文中のデータに限定して分析を行った。そこで、本稿で扱う「は」準体法の用例も、以下、会話文中のデータに限定して考察を進めていく。

また、「～給ふ」、「～侍り」、(ラ)ル、(サ)スなどの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合は分析対象に含めている。このような待遇表現の接辞が入る場合と入らない場合とで、何らかの相違があるか否かという点については、今後、吟味していく必要がある。

4. 分析

4.1. 助動詞を含まない動詞準体句

4.1.1 動詞意味タイプ別分布

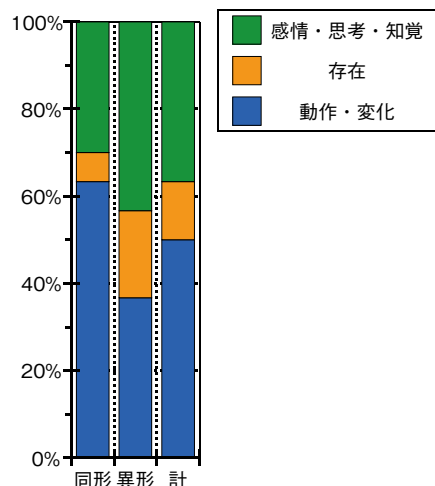
「は」準体法の用例を、終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けて、動詞の意味タイプ別に分類したのが、次の表1およびグラフ1である。

助詞「に」や「を」の場合と比較して、連体法や助詞なし準体法、及び「が」準体法の分布により類似し

表1 「は」準体法 動詞意味タイプ別分布

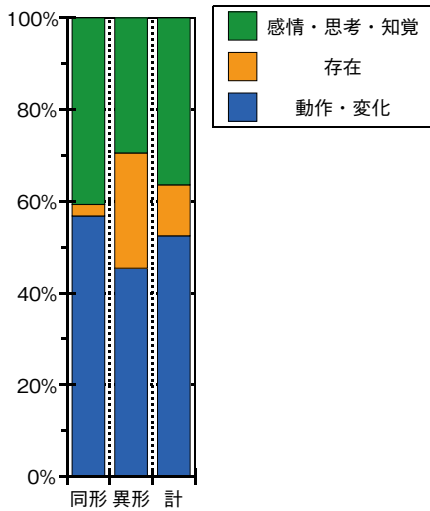
	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	19 (63)	11 (34)	30 (50)
存在	2 (7)	6 (21)	8 (13)
感情・思考・知覚	9 (30)	13 (45)	22 (37)
計	30 (100)	30 (100)	60 (100)

グラフ1 「は」準体法 動詞意味タイプ別分布

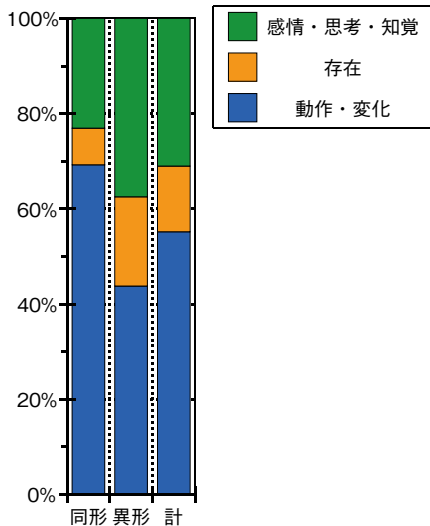


ている。以下に比較のために、土岐（2008）、（2009）、（2010）から、連体法と助詞なし準体法と「が」準体法のグラフを再掲する。

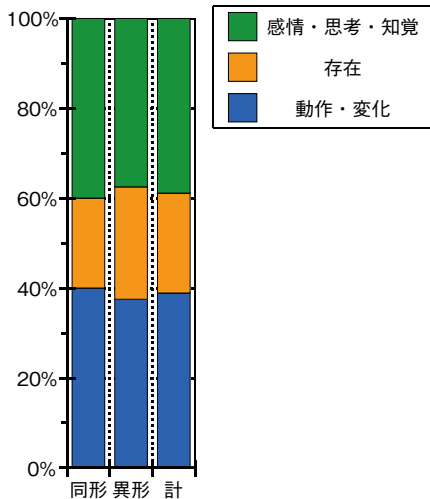
連体節述語動詞意味タイプ別分布



助詞なし準体法 動詞意味タイプ別分布



「が」準体法 動詞意味タイプ別分布



計の割合を見ると、「は」準体法は連体法に最も近いが、終止・連体異形の活用語の割合では、「が」準体法や助詞なし準体法に近い。準体法における動詞意味タイプ別分布の傾向は、助詞の種類により特徴が見られることが明らかになった。

「は」準体法では、一番比率が高いのが動作・変化動詞であり、次が感情・思考・知覚動詞、一番比率が低いのが存在詞となっている。これは連体法の傾向と一致し、連体形終止法の傾向と比較すると、動作・変化動詞と感情・思考・知覚動詞の割合が逆転している。

以下の表2とグラフ2に、同形活用語と異形活用語の計の数値を用いて、連体法、助詞無し準体法、「は」準体法、「が」準体法、「を」準体法、「に」準体法、連体形終止法の分布を比較して示す。

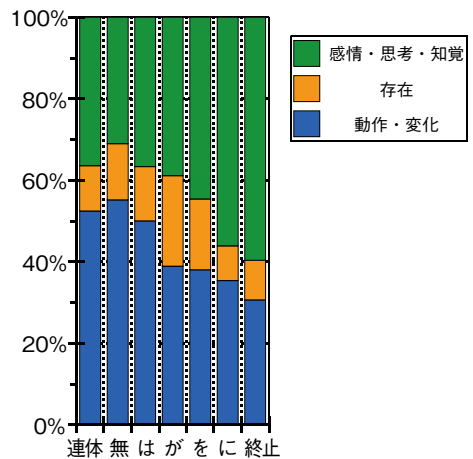
最左端が連体法であり、次の無助詞準体法から、「は」準体法、「が」準体法、「を」準体法、「に」準体法、連体形終止法と、感情・思考・知覚動詞の比率が高まっていき、ほぼそれに反比例するように動作・変化動詞の比率が下がっている。

連体法と無助詞準体法と「は」準体法は、動作・変化動詞の比率が最も高く、「が」準体法は動作・変化動詞と感情・思考・知覚動詞の比率が同率であり、「を」準体法と「に」準体法と連体形終止法は、感情・思考・知覚動詞の比率が最も高い。準体法の分布は、無助詞から接続助詞的用法を持つ「を」や「に」へと、相互に連続性を有しながら、動作・変化動詞から感情・思考・知覚動詞へと比重がシフトしていくことが見て取れる。

表2 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体	準無	準は	準が	準を	準に	終止
動作・変化	731	16	30	7	45	31	19
存在	155	4	8	4	21	7	6
感情・思考・知覚	508	9	22	7	53	48	37
計	1394	29	60	18	119	86	62

グラフ2 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布



以下に「は」準体法の動詞意味タイプ別全例を挙げる。

4.1.2 動作・変化動詞

【同形】

- 1) (源氏)こゝにもものしたまふは、たれにか(1,161,14)
- 2) (入道)荒き浪の声にまじるは、かなしくも思ふ給へられながら(2,67,4)
- 3) (源氏)この人をかうまで思ひやり言問ふは、猶思ふやうの侍ぞ(2,105,9)
- 4) (尼君)このおとゞの君の、世に二つなき御ありさまながら、世に仕へ給は、故大納言のいまひときごみなり劣り給ひて、更衣腹と言はれ給ひしけぢめにこそおはすめれ(2,218,2)
- 5) (源氏)かくてもものし給ふは、いかでさやうならむ人のけしきの深さ浅さをも見むなど、さうべしきまゝに願ひ思ひしを、本意なむかなふ心ちしける(3,7,9)
- 6) (内大臣)かくてもものし給ふは、つきなくうあうみしくなどやある(3,19,2)
- 7) (北の方)をのれ古し給へるいとおしみに、じほうなる人のゆ(る)ぎ所あるまじきをとて、取り寄せてもてかしづき給は、いかゞつらからぬ(3,129,2)
- 8) (朱雀院)さるべき人の心にゆるしをきたるまゝにて世中を過ぐすは、宿世へにて、後の世に衰へあるときも、身づからのあやまちにはならず(3,218,8)
- 9) (紫上)まめやかには、いと行く先少なき心ちするを、ことしもいとかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしろめたくこそ(3,350,15)
- 10) (源氏)空に焚くはいづくの煙ぞと思ひは(わ)かれぬこそよけれ(4,71,13)
- 11) (夕霧)まかでん方も見えずなり行は、いかゞすべき(4,94,11)
- 12) (夕霧)いかに人笑ふらん。さるかたくなしきものに守られ給は、御ためにもたけからずや(4,112,12)
- 13) (大納言)けしうはあらず成ゆくは、此わたりにてをのづから物に合はするけなり(4,238,2)
- 14) (大納言)けちかき人の後れたてまつりて生きめぐらふは、おほろけの命長さなりかしくこそおほえはべれ(4,238,13)
- 15) (薫)おなじくはむかしの御事も違えきこえず、われも人も、世の常に心とけて聞こえ侍らばやと思ひよるは、つきなかるべきことにて、さやうなるためしなくやはある(4,386,7)
- 16) (薫)袖の色をひきかけさせ給はしもことわりなれど(4,392,7)
- 17) (大君)よろしきひまあらば、聞こえまほしきことも侍れど、たゞ消え入るやうにのみなり行は、くちをしきわざにこそ(4,457,6)
- 18) (中将君)かゝる程の有さまに身をやつすは口お

(を)しき物になん侍けると、身にも思ひ知らるゝを(5,147,11)

- 19) (薫)なぞ、こは奉らぬ。人多く見る時なむ、透きたるもの着るはほうぞくにおほゆる(5,301,7)

【異形】

- 20) (源氏)身をなきになして、この琴をまねび取らむとまどひてだに、し得るはかたくなむありける(3,343,15)
- 21) (空蝉)おさなき人のかゝる事言ひ伝ふるはいみじく忌むなるものを(1,75,9)
- 22) (桐壺院)心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきこと也(1,291,4)
- 23) (源氏)おほやけのかしこまりなる人のうつしごまにて世中にあり経るは、咎重きわざに人の国にもし侍なるを(2,7,9)
- 24) (源氏)まして思ふ人具するは例なきことなるを(2,12,10)
- 25) (源氏と従者)かくかなしき目をさへ見、命尽きなんとするは、先の世の報ひか、此世の犯しか(2,54,15)
- 26) (八宮)物さびしく心ほそき世を経るは例の事也(4,352,12)
- 27) (姫君達)さても、あさましうて明け暮らさるゝは月日成けり(4,364,14)
- 28) (匂宮)なぞの車ぞ。暗きほどに急ぎ出づるは(5,153,7)
- 29) (右近)時方と仰せらるゝは、たれにか(5,206,15)
- 30) (薫)不便なるわざかな。おどろへしからぬ御心ちのさすがに日数経るは、いとあしきわざに侍。御風邪よくつくるはせ給へ(5,215,15)

4.1.3 存在動詞

【同形】

- 31) (近江君)かくてさぶらふは、何のもの思ひか侍らむ(3,19,4)
- 32) (女房)二心おはしますはつらけれど、それもことわりなれば、なをわが御前をば幸ひ人ところは申さめ(5,96,2)

【異形】

- 33) (帝)よろこびなども、思知り給はんと思ふことあるを、聞き入れ給はぬさまにのみあるは、かゝる御癖なりけり(3,136,4)
- 34) (朱雀院)その中に、後見などあるはさる方にも思譲り侍り、三宮なむ、いはけなき齢にて、たゞひとり頼もしき物とならひて(3,208,6)
- 35) (乳母)何事につけても御後見し給人あるは頼もしげなり(3,215,6)
- 36) (源氏)あい行なく、人をもて離るゝ心あるは、

いとうちとけがたく、思ぐまなきわざになむあるべき (3,288,13)

- 37) (夕霧) いと心うく思ひ取る方なき心あるは、いとあしきわざなり (4,153,13)
- 38) (妹尼の文) この人助け給へ。さすがにけふまでもあるは、死ぬまじかりける人を、つきしみ両じたる物の去らぬにこそあめれ (5,333,11)

4.1.4 感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 39) (命婦) かばかり心ほそき御ありさまに、なを世をつきせずおほしはゞかるはつきなうこそ (1,215,11)
- 40) (女房) 言ふかひなき御事は、たゞかきくらすちし侍はさる物にて (1,321,12)
- 41) (右近) かうやつれ給へる御さまの、劣り給まじく見え給は、ありがたうなむ (2,352,3)
- 42) (源氏) 右近ばかりを形見に見るはくちおしくなむ (2,359,5)
- 43) (源氏) かくて見たてまつるは夢にやとのみ思ひなすを (2,415,12)
- 44) (源氏) 宮に見えたてまつるは、はづかしうこそあれ (3,45,5)
- 45) (源氏) えかけ離れて思ふはあらじ (3,62,7)
- 46) (律師) また、女人のあしき身を受け、長夜の闇にまどふは、たゞかやうの罪によりなむさるいみじき報いをも受くるものなる (4,105,6)
- 47) (いゑ主) 御嶽精進しけるを、いたう老い給へる人のお)もくなやみ給ふは、いかゞ (5,324,12)

【異形】

- 48) (大后) 何事につけても、おほやけの御方にうしろやすからず見ゆるは、春宮の御世、心寄せことなる人なればことほりになむあめる (1,390,12)
- 49) (明石入道の文) 仮名文見たまふるは、目の暇いりて、念仏も懈怠するやうに益なうてなん、御消息もたてまつらぬを (3,276,5)
- 50) (夕霧) こよひうけたまはる物の音どもの、みなひとしく耳おどろき侍るは、なをかくわざともあらぬ御遊びと、かねて思給へたゆみける心のさはぐにや侍らむ、唱歌などいと仕うまつりにくゝなむ (3,342,9)
- 51) (悪御達) 源氏の御末へに、ひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもり、ほけたりける人のひがごとくや (4,252,4)
- 52) (阿闍梨) げに、はた、この姫君たちの琴弾き合はせて遊び給へる、河波にきをひて聞こえ侍は、いとおもしろく、極楽思ひやられ侍や (4,306,15)
- 53) (薫) 侍従といひし人は、ほのかにおほゆるは、五つ六つばかりなりし程にや、にはかに胸を病み

て亡せにきとなむ聞く (4,332,7)

- 54) (薫) なよびけしきばみたるふるまひをならひ侍らねば、人づてに聞こえはべるは、言の葉もつきはべらず (4,360,7)
- 55) (中将君) つらき目見せず、人に侮られじの心にてこそ、鳥の音聞こえざらん住まゐるまで思給へきつれ、げに人の御有さまはひを見たてまつり思給ふるは、下仕へのほどなどにて、かゝる人の御あたりに馴れきこえんは、かひありぬべし (5,152,5)
- 56) (浮舟) 年ごろ、いとはるかにのみ思きこえさせしに、かう見たてまつり侍は、何ごととも慰む心し侍てなん (5,163,14)
- 57) (右近) すべて女のたいへしきぞとて、館のうちにもをい給へらざりしかば、東の人になりて、まゝもいまに恋ひ泣き侍るは、罪深くこそ見たまふれ (5,244,9)
- 58) (右近) ゆゝしきついでにやうに侍れど、上も下もかゝる筋のことはおほし乱るゝはいとあしきわざなり (5,244,10)
- 59) (妹尼) むかし聞き侍りしよりも、こよなくおほえ侍は、山風をのみ聞きなれ侍にける耳からにや (5,352,12)
- 60) (薫) かの山里に知るべき人の、隠ろへて侍るやうに聞き侍りしを、たしかにてこそは、いかなるさまにてなども、漏らしきこえぬ、など思ひたまふるほどに、御弟子になりて、忌むことなど授け給ひてけりと聞き侍るは、まことか (5,393,5)

4.1.5 文脈における準体句の機能

文脈における形容詞準体句の機能について、後接の句における準体句の役割と後接の句の形式を以下に示す。以下の番号は先に挙げた用例の番号に対応している

【動作・変化動詞】

- | | | |
|----|----|-----------------|
| 1 | 人 | 疑問詞「誰」+に+か |
| 2 | こと | 形容詞「かなし」 |
| 3 | こと | 理由を表す存在句 |
| 4 | こと | 理由を表す存在句 |
| 5 | こと | 感情を表す動詞句「心地す」 |
| 6 | こと | 形容詞「うらうるし」 |
| 7 | こと | 形容詞「つらし」 |
| 8 | こと | 判断を表す名詞句「宿世なり」 |
| 9 | こと | 形容詞「うしろめたし」 |
| 10 | もの | 疑問詞「いづく」+の+煙+ぞ |
| 11 | こと | 疑問詞「いかが」+す+べし |
| 12 | こと | 形容詞+否定+や |
| 13 | こと | 理由を表す動詞句 |
| 14 | こと | 推測される感情を表す動詞句 |
| 15 | こと | 形容詞「つきなし」+こと+なり |

- 16 こと 判断を表す名詞句「理なり」
 17 こと 形容詞「くちをし」+わざ+なり
 18 こと 形容詞「くちをし」+もの+なり
 19 こと 判断・感情を表す句
 20 こと 形容詞「かたし」
 21 こと 判断を表す名詞句
 22 こと 判断を表す名詞句
 23 こと 形容詞「咎重し」+わざ+に+す
 24 こと 形容詞「例なし」+こと+なり
 25 こと 判断を表す名詞句+か
 26 こと 判断を表す名詞句「例のこと」+なり
 27 こと 判断を表す名詞句「月日」+なり
 28 もの 疑問詞「なぞ」+の+車+ぞ
 29 人 疑問詞「誰」+に+か
 30 こと 判断を表す名詞句「わざ」+なり

【存在動詞】

- 31 こと 感情を表す存在句
 32 こと 形容詞「つらし」
 33 こと 判断を表す名詞句「かかる御癖」+なり
 34 人 動詞句
 35 こと 判断を表す名詞句「頼もしげ」+なり
 36 こと 形容詞「うちとけがたし」、判断を表す名詞句「わざ」+なり
 37 こと 形容詞「悪し」+わざ+なり
 38 こと 理由を表す動詞句

【感情・思考・知覚動詞】

- 39 こと 形容詞「つきなし」
 40 こと 判断を表す名詞句「さる物」+なり
 41 こと (様子) 形容詞「ありがたし」
 42 こと 形容詞「くちをし」
 43 こと 判断を表す名詞句「夢」+に+や
 44 こと 形容詞「はづかし」
 45 こと 存在句「あらじ」
 46 こと 判断を表す名詞句もの+なり
 47 人 (こと) 疑問詞「いかが」
 48 こと 判断を表す名詞句「理なり」
 49 こと 説明を表す動詞句、形容詞「益なし」
 50 こと 理由を表す動詞句+に+や+ある
 51 こと 判断を表す名詞句「僻事」+に+や
 52 こと (もの) 形容詞「おもしろし」
 53 こと (人) 説明を表す動詞句
 54 こと 説明を表す動詞句
 55 こと 内容を表す動詞句
 56 こと 感情を表す動詞句「心地す」
 57 こと 形容詞「罪深し」
 58 こと 形容詞「悪し」+わざ+なり
 59 こと 理由を表す名詞句「耳から」+に+や
 60 こと 判断を表す名詞句「まこと」+か

4.2. 助動詞を含まない形容詞準体句

4.2.1 意味類型と分布

「は」準体法の形容詞の例について、形容詞の意味についてABCの類型を立てて考察した吉田(1995)にならない、A情意的(感情形容詞、評価形容詞)、C属性的(次元形容詞²)、色彩形容詞、その他)、その中間的なB(否定形容詞、程度形容詞、感覚形容詞、時間形容詞)という三つの類型に分け、更にAの感情・評価形容詞の評価の意味について、プラス評価は+、マイナス評価は-という独自の符号を付したのが、次の表3である。

A(情意的)とB(中間的)とC(属性的)のすべての類型が現れ、かつプラス評価的な意味を伴う形容詞もマイナス評価的な意味を伴う形容詞もともに現れる。

連体形終止法では、Cの属性的形容詞は一例も見られず、Bの中間的な「なし」が3例見られる以外は、すべてAの情意的形容詞であり、かつ、Aの情意的形容詞の評価の意味合いは「良し」1例を除き、すべてマイナス評価の意味合いを伴うものであった。一方、連体法では形容詞の用例の総数が多いこともあって、ABCすべての類型が観察され、またプラス評価の意味合いを含む形容詞も豊富に見られた。(土岐(2005、2008))

以上の結果を比較すると、「は」準体法は、土岐(2010)で述べた「が」準体法の場合と同様に、連体形終止法よりは連体法との共通性の高さを示す結果となっている点で興味深い。

また、動詞節に対する形容詞の出現率を見てみると、「は」準体法は20%(動詞節60例、形容詞節12例)となっている。

土岐(2009)、(2010)、(2011)、(2012)の結果と併せて、他の用法と比較すると、「が」準体法が29%(動詞節21例、形容詞節6例)、助詞無し準体法は14%(動詞節29例、形容詞節4例)、連体形終止法29%(動詞節62例、形容詞節18例)、連体法113%(動詞節1394例、形容詞節1573例)、「を」準体法27%(動詞節119例、形容詞節33例)、「に」準体法33%(動詞節86例、形容詞節28例)である。

表3 「は」準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
～がたし	3	A	0
かしこし	2	A	+
うれし	1	A	+
多し	1	C	0
おぼめかし	1	A	-
苦し	1	A	-
高し	1	C	0
長し	1	C	0
なし	1	B	0

計12例

「は」準体法は、「を」準体法や「が」準体法の場合と同様に、連体法よりは連体形終止法との共通性の高さを示していると言えよう。

連体法と終止法の場合については形容詞の総出現数が多いため、分析の便宜上、対象としたのは6例以上出現した形容詞に限定しているが、準体法の場合は形容詞の総出現数が少ないため、現れたすべての形容詞を扱っている。そのため、厳密な意味での両者の比較は難しいのであるが、以上の結果から、「は」準体法の形容詞については、「が」「を」「に」などの他の助詞の準体法形容詞と同様に、意味の類型の観点からは連体法に近く、動詞と比較した出現率の観点からは連体形終止法に近いという特徴を示していると言えよう。

以下に「は」準体法形容詞の全用例を示す。

【同形】

用例なし。

【異形】

- 61) (帝の文) いと忍びがたきはわりなきわざになん (1,12,7)
- 62) (柏木) 心なんまだなつきがたきは、見馴れぬ人を知るにやあらむ (3,313,7)
- 63) (帝) しばしは夢かとのみたどられしを、やうへ思ひしづまるにしも、さむべき方なく耐えがたきは、いきすべきわざにかとも問ひあはすべき人だになきを、忍びてはまいり給なんや (1,11,14)
- 64) (源氏) げにたゞ人よりも、かゝる筋には、わたくしざまの御後見なきは、くちおしげなるわざになん侍ける (3,228,12)
- 65) (母君の文) いともかしこきはをき所も侍らず (1,16,1)
- 66) (柏木) これは、さるわきまへ心もおさへ侍らぬものなれど、その中にも心かしこきは、をのづから魂侍らむかし (3,313,10)
- 67) (薫) あらずや。忍びてはよかるべくおぼすこともありけるがうれしきは、ひが耳か、聞こえさせんとぞ (5,66,12)
- 68) (源氏) をくれたる事多かるは、何わざしてかしづきしぞと (2,441,15)
- 69) (源氏) 年月の積りをも、まぎれなく数へらるゝ心ならひに、かくおぼめかしきはいみじうつらくこそ (3,252,13)
- 70) (大君) 疎ましと見給てむもさすがに苦しきは、いかなるにか (4,431,4)
- 71) (柏木) 罪の深き身にやあらむ。陀羅尼の声高きはいとけおそろしくて、いよへ死ぬべくこそおぼゆれ (4,7,10)
- 72) (左大臣) かゝる御事を見たまふ(る)につけて、命ながきは心うく思ふ給えらるゝ世の末にも侍かな (2,7,2)

4.2.2 文脈における準体句の機能

動詞の場合と同様に、文脈における形容詞準体句の機能について、後接の句における準体句の役割と後接の句の形式を以下に示す。

- 61 こと 形容詞「わりなし」+わざ+なり
- 62 こと 理由を表す動詞句+に+や+あらむ
- 63 こと 内容を表す形容詞句
- 64 こと 形容動詞「くちをしげなり」+わざ+なり
- 65 こと (もの) 説明を表す存在句
- 66 もの (猫) 説明を表す存在句
- 67 こと (もの) 説明を表す名詞句「ひが耳」+か
- 68 こと 説明を表す動詞句 (疑問詞「何」わざして+動詞句+ぞ)
- 69 こと 形容詞「つらし」
- 70 こと 疑問詞「いかなる」+に+か
- 71 こと (もの) 形容詞「おそろし」
- 72 こと 形容詞「心うし」

4.3. 助動詞を含む準体句

受け身と自発の(ラ)ル、使役の(サ)スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について、総数が多い順にまとめたのが次の表4である。助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

ナリの場合、終止・連体同形の活用語につくナリは対象から除外した。以下に示した終止ナリと連体ナリは終止・連体異形の活用語につくものである。また、非活用語につくナリを以下では体言ナリとしてある。

表4 「は」準体法助動詞総数順

形式	総数
ム	51
ズ	20
タリ	16
キ	13
リ	11
メリ	9
ツ	7
体言ナリ	7
ケリ	6
ヌ	6
マジ	2
シム	1
終止ナリ	1
ベシ	1
ラム	1

計152例

また、助動詞自体の活用が終止・連体同形のもの
は網掛けで示してある。

助詞別準体法で比較すると、「に」準体法や「を」準
体法より、「が」準体法や助詞なし準体法に、より分布
が類似していることが見てとれる。「が」準体法と同様
に、終止・連体同形の推量助動詞ムが最も多く、全体
のおおよそ3分の1をしめている。しかし、終止・連体
異形の助動詞で最も多いのが否定のズである点は、他
のどの助詞の準体法とも異なる「は」準体法の特徴で
あると言えよう。それ以外の助動詞では、過去・完了
系の助動詞が比較的上位に現れるが、推量の助動詞と
の明確な序列が認められるほどではないようである。

5. おわりに

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の「は」準体句のデータを分析
した結果、以下のような特徴が観察された。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞
の意味タイプは、
 - 1 動作・変化動詞
 - 2 感情・思考・知覚動詞
 - 3 存在詞
 の順に多い。
2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、形容詞の
意味類型は
 - A 情緒的
 - B 中間的
 - C 属性的形容詞
 のすべてが現れる。

また、評価の意味を有する形容詞の場合、プラス
評価の意味合いを持つものと、マイナス評価の意
味合いをもつものとがともに現れる。
3. 助動詞を含む準体句の場合、最も多いのが推量の
ムであり、次が否定のズである。それ以外では、
過去・完了系の助動詞が多い傾向はあるが、推量
系の助動詞との明確な序列は認められない。

本稿では係助詞「は」が後接する準体法について考
察を行った。次稿では同様に係助詞「も」について考
察を行う。今後も引き続き、他の助詞が後接する場
合の準体法の分析を進め、それらの結果も併せて準体法
の位置について考察していく。

注

1. この他、分類作業中に所在が不明になった例が2例あるが、
全体の分布傾向には大きな影響はない。
2. 吉田 (1995) によると、
せばし、たかし、ちかし、とほし、ふかし、みじかし、ひ
ろし、ほそし、ちひさし
が例示されている。

主要参考文献

- 尾上圭介 (1982) 「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講
座日本語学2 文法史』明治書院1-19
同 (2001) 『文法と意味I』くろしお出版
- 小池清治 (1967) 「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏
物語を中心に—」『国文学 言語と文芸』54、12-21
- 近藤泰弘 (1986) 「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』5-2、
22-30
同 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
同 (2001) 「名詞節と項構造」『日本語学』1-1、41-52
- 信太知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形
準体法の消滅を背景として—」『国語学』82、29-41
同 (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法につ
いて—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」
『近代語研究』7、121-139、武蔵野書院
- 同 (1996) 「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を
中心に句相互の関連性について—」『神女大國文』7、172-
189
同 (2006) 「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—句
構造の観点から—」『神女大國文』17、29-44
- 土岐留美江 (2005) 「平安和文会話文における連体形終止文」『日
本語の研究』1-4、16-31
同 (2008) 「平安和文会話文における連体修飾連体形と連
体形終止連体形の比較分析」『愛知教育大学研究報告 (人
文・社会科学編)』57、55-62
同 (2009) 「平安和文会話文における準体句—助詞が後接
しない場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学
編)』58、31-39
同 (2010) 「平安和文会話文における準体句—助詞「が」後
接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』
59、15-23
同 (2011) 「平安和文会話文における準体句—助詞「を」後
接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』
60、(ページ数)
同 (2012) 「平安和文会話文における準体句—助詞「に」後
接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』
61、(ページ数)
- 山内洋一郎 (1959) 「院政期の連体形終止」『国文学攷』21、240-
250、広島大学国語国文学会
同 (1963) 「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30、33-
41、広島大学国語国文学会
同 (1964) 「助動詞「うず」について—連体形終止の異例
として—」『広島大学文学部紀要』23-3、125-152
同 (1970) 「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観
点から—」『国文学攷』54、55-58、広島大学国語国文学会
同 (1992) 「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一
郎編『古代語の構造と展開』25-44、和泉書院
同 (1997) 「助動詞「うず」の連体形終止について—中世
における終止形の残存—」『文教国文学』37、1-8
同 (2003) 『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版
- 吉田光浩 (1995) 「平安期形容詞の意味と終止用法について—『枕
草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・
敦子先生古希記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古希記
念論集 日本語の研究』112-145、明治書院

(2012年8月2日受理)